『東京大学言語学論集』**41** (2019.9) 103-115

2010 年代の日本語歌謡曲における特殊モーラ

—2 名のシンガーソングライターの対照を通して—

平田　秀
hiratashu1925@gmail.com

キーワード: 日本語音韻論　音節とモーラ　特殊モーラ

要旨

本論では、日本語歌謡曲における特殊モーラの自立性について、2010 年代に活躍した 2 名の男性シンガーソングライター・星野源と米津玄師の対照を通して論じる。特殊モーラが独立した 1 つの音符を付与されている割合は、星野の楽曲において高く、米津の楽曲では低いという結果であり、2 名のシンガーソングライター間で大きな差がみられた。その一方で、二重母音の第 2 モーラであるイ音・撥音は自立性をもちやすく、長母音の第 2 モーラ・促音は自立性を失いやすい点は共通していた。本論では、単独で独自の音色を有する特殊モーラである二重母音の第 2 モーラであるイ音・撥音は自立性をもちやすく、独自の音色をもたない特殊モーラである長母音の第 2 モーラ・促音は自立性を失いやすいことを指摘する。

1. はじめに

日本語（本論では共通語を指す）は単語の長さをモーラに基づいて数える言語であり、（1）に示す自立モーラと（2）に示す特殊モーラが、等しく1モーラとして音韻論的に等時間性をもつと扱われることが広く知られている。

（1）日本語における自立モーラの例: あ、か、さ…

（2）日本語における特殊モーラ（M）

a. 二重母音の第2モーラであるイ音（/J/）[1]:　あい、くい、こい…

b. 長母音の第2モーラ（/R/）[2]:　コーヒー、けいえい、とうきょう…

c. 撥音（/N/）:　かん、きん…

---

[1] 本論では、亀井孝・河野六郎・千野栄一編（1996: 1039）で挙げられている通り、ア段・ウ段・オ段母音に後続する場合のイ音を二重母音の第 2 モーラとして扱い、/J/と表記する。イ段・エ段母音に後続するイ音は/R/として本論では扱った。

[2] 本論では、以下の a～d を/R/とする。
a. 音引き（ー）を用いて表記される音: ガール、パーティー…
b. 同一母音が連続している場合の 2 モーラ目: ああ、ねえ…
c. エ段母音に後続するイ音: えいえん、きれい…
d. オ段母音に後続するウ音: とうきょう、でしょう…

d. 促音（/Q/）:　　おもった、ポケット…

日本語の音節は、（3）に示す通り、自立モーラのみからなる1モーラ1音節の軽音節と自立モーラに特殊モーラが後続する2モーラ1音節の重音節に大別される[3]。

（3）日本語の音節構造

軽音節（1モーラ1音節）: CV　　あ、か、さ…

重音節（2モーラ1音節）: CVM　　あい、きょう、かん、あっ…

さきに述べた通り、（1）の自立モーラと（2）の特殊モーラは等しく1モーラの音韻論的な長さをもつ。俳句や短歌、川柳においては、自立モーラと特殊モーラが同様に1つの韻律単位として扱われることがその証拠となる。しかしながら、特殊モーラは（4）に示す点で自立モーラと異なるふるまいを見せる。

（4）特殊モーラのもつ性質

a. 特殊モーラが音節の最初に立つことは基本的にない[4]。

b. アクセントの下げ核は、特殊モーラを避けて自立モーラが担う傾向がある（上野善道 2003: 69）

特殊モーラは音韻論的な長さとしては1モーラをもつが、（4）に示す通りの自立性が低いとみなせる特徴をもつため、特殊モーラが日本語のリズムの分節単位として自立性をもつのか、自立性をもたず特殊モーラとそれに先行する自立拍を含む音節全体が分節単位であるのかが注目されてきた。

日本語のリズムの分節単位を考察するにあたって、歌謡を用いる先行研究は複数ある。Vance（1987: 67–70）では、日本の童謡・唱歌の楽譜を例にとり、基本的に1モーラにつき1つの音符が付与されること（図1 a・b）、2モーラが1つの音符に対応する場合は、特殊モーラを含む2モーラ1音節の場合（図2）が圧倒的に多いことを示している。特殊モーラを含まない2モーラ2音節に1つの音符が対応する場合（図3）は稀であると指摘している。

[3] 日本語の音節構造をめぐっては、CVMM からなる超重音節を認めるかが問題になるケースが存在するが、超重音節を認めるか否かには本論では立ち入らないものとする。

[4] 近年の口語やくだけた文体の文においては、「んで」（＝そんで、それで）、「ったく」（＝まったく）といった、撥音や促音で音節が始まると想定できるケースもみられる。

a. ♪ ♪ b. ♪ ♪ | | | | CV CV CV M	♪ ／＼ CV M	♪ ／＼ CV CV
図1. 1モーラ1音符	図2. 2モーラ1音節1音符	図3. 2モーラ2音節1音符

田中真一（2000, 2008）は1930～1998年に作曲された歌謡866曲を分析対象とし、楽譜において特殊モーラが独立した1つの音符を与えられているか否かを基準に、歌謡における特殊モーラの自立性を考察している。対象とした曲中に出現した特殊モーラのうち、80%に独立した音符が与えられ、自立性をもつと判断される結果であった（田中 2008: 60）。年代が新しくなるにつれ、特殊モーラを含む重音節全体に1つの音符が付与され、特殊モーラが自立しないとみなせる例が増加することが示されている（田中 2008: 62）。また、4種の特殊モーラ別の自立性の差をみると、/J/ > /N/ > /R/ > /Q/の順で自立性が高いことが示されている（田中 2000: 68）[5]。

氏平明（1996）は、3種の資料[6]について、田中（2000, 2008）と同様に特殊モーラに独立した音符が付与されているかをもとに、特殊モーラの自立性について考察している。資料1では特殊モーラのうちの66.7%が独立して音符が与えられているという結果であった。同様に、資料2では80.5%が、資料3では81.4%の特殊モーラが独立した音符を付与されていた（氏平 1996: 74）。また、対象とした3種の資料のうち、資料1・2では/J/ > /R/ > /N/ > /Q/の順で自立性が高く、残る資料3では/J/ > /Q/ > /N/ > /R/の順で高いことが示されている（氏平 1996: 74）。

窪薗晴夫（1999）は、『NHK 日本の歌・ふるさとの歌100曲』に掲載の全100曲を分析対象としている。同様に、特殊モーラの種類別に独立した1つの音符が付与されているかの分析が行われている。対象とする曲中に出現する特殊モーラ全体では、66%が独立した音符が付与され、残りの34%が先行する自立モーラと合わせて1つの音符が付与されているという結果であった（窪薗 1999: 247）。また、特殊モーラの種類別では、/J/ > /R/ > /N/ > /Q/の順で自立性が高いことが示されている[7]（窪薗 1999: 247）

平田秀（2017）は2010年～2016年に発表された日本語歌謡曲全133曲を対象として、曲中の自立モーラの自立性について論じている。田中（2000, 2008）・氏平（1996）・窪薗（1999）と異なり、楽譜において特殊モーラが独立した1つの音符を与えられているかではなく、歌謡曲のもつ同一のフレーズを繰り返して演奏する特性を用いて特殊モーラの自立性を分析している。

---

[5] 田中（2000: 157）では、/J/の 13%、/N/の 22%、/R/の 30%、/Q/の 52%が、独立した音符を与えられていない記述がある。また、田中（2008: 68）では、独立した音符が付与されている例の出現数・割合が示されており、/J/の 89%、/N/の 84%、/R/の 76%、/Q/の 52%が独立した音符が与えられている旨が述べられている。

[6] 氏平 (1996: 72) において、資料 1 が「明治に作詞作曲された童謡や地方の民謡それに現代のポップスまで多種多様な曲が 111 曲納められている」もの、資料 2 が「明治・大正・昭和（戦前）に作詞作曲された、音楽の教科書に載っている曲」を納めたもの、資料 3 が「今日まで伝承されているわらべうたを採取録音して、昭和 36 年頃楽譜化したもの」と記述されている。

[7] 窪薗（1999: 247）では、それぞれの特殊モーラの自立している割合について、/J/のうち 94%が 1 つの独立した音符が付与されていることが示されている。/R/は 70%、/N/は 51%、/Q/は 36%が 1 つの音符を与えられている。

分析の結果、/J/ > /N/ > /Q/ > /R/の順で自立性が認められる特殊モーラの出現率が高い結果となった（平田 2017: 58）。

田中（2000, 2008）・氏平（1996）・窪薗（1999）は、楽曲の1番の歌詞に出現する特殊モーラについて、独立した1つの音符があたえられているか否かでその自立性を判定している。本論でも比較対照のため、田中（2000, 2008）・氏平（1996）・窪薗（1999）と同様、分析対象とする楽曲の1番の歌詞を対象に、独立した1つの音符が与えられているか否かを基準に特殊モーラの自立性を判定する。

本論で分析の対象とする楽曲については、次の第2節で詳述する。続く第3節で、本論での分析結果を示し、諸先行研究との異同について考察する。第4節はまとめである。

2. 分析の対象

本論では、以下の（5a）～（5c）に示す合計89の楽曲を分析対象とする。

（5）本論で分析対象とする楽曲

a. 『オールヒット曲 2019』に掲載の2018年に発表された楽曲のうち、星野源・米津玄師の楽曲を除く24曲

b. 『ギター弾き語り 星野源 BEST SELECTION』『オールヒット曲 2019』に掲載の星野源の楽曲合計37曲

c. 『米津玄師 COLLECTION -GUITAR SONGBOOK-』『オールヒット曲 2019』に掲載の米津玄師の楽曲合計28曲

（5a）の『オールヒット曲 2019』は自由国民社から年1回刊行されている楽譜のシリーズで、1960年代から現在までの幅広い年代のヒット曲の楽譜が掲載されている。本論では、同書籍に掲載の楽曲のうち、2018年に発表された24曲を取り扱う。なお、同書籍に掲載された2018年発表の楽曲には星野源の楽曲2曲、米津玄師の楽曲1曲が含まれるが、これら3曲はそれぞれの歌手の分類に含めて本論では扱う。（5b）（5c）はそれぞれ、星野源・米津玄師の楽曲のみを収めた楽譜集である。

（5a）『オールヒット曲 2019』に掲載の楽曲は、24曲中23曲が（6）に示すいずれかの条件にあてはまる。いずれも、多数の聴取者の存在を想定できる、人口に膾炙した楽曲であると言える[8]。

[8] （6a）～（6d）に該当しない1曲は男性グループ・SMAPの元メンバー3人で構成されたグループ「新しい地図」がウェブ配信限定で発売した楽曲「雨あがりのステップ」であり、当該曲は10万以上の有料配信ダウンロード数を記録し（https://www.oricon.co.jp/confidence/special/52269/3/ 2019年4月19日閲覧）、人口に膾炙した楽曲であると言える。

（6）『オールヒット曲 2019』に収録の楽曲の特徴[9]

a. オリコン社調べによる年間ヒットチャートで、上位100位以内に入ったシングルCD・アルバムCDに収録されている曲である。

b. 映画・テレビドラマの主題歌として使用された曲である。

c. CMソングとして使用された曲である。

d. NHK「紅白歌合戦」で演奏された曲である。

（5b）の星野源、（5c）の米津玄師については、両者とも自身の歌う楽曲の作詞作曲を行う、シンガーソングライターである。（7）（8）にプロフィールを示す。

（7）シンガーソングライター・星野源（ほしの・げん）について[10]

- 1981年生まれ、埼玉県出身の男性である。
- 2010年～2018年の間にアルバムCDを5枚発表した。
- テレビドラマ主題歌として使用された2016年発表の楽曲「恋」がCD売り上げ25万枚・有料配信ダウンロード数200万件を超えるヒットとなり、エクシング社のカラオケ「JOYSOUND」で2017年に最も歌われた回数が多い楽曲となった。

（8）シンガーソングライター・米津玄師（よねづ・けんし）について[11]

- 1991年生まれ、徳島県出身の男性である。
- 2012年～2018年の間にアルバムCDを4枚発表した。
- テレビドラマ主題歌として使用された2018年発表の楽曲「Lemon」がCD売り上げ50万枚・有料配信ダウンロード数200万件を超えるヒットとなり、エクシング社のカラオケ「JOYSOUND」で2018年に最も歌われた回数が多い楽曲となった。

この2名のシンガーソングライターを扱う理由は2点ある。まず1点目は、キャリアや作品数が互いに似ており、2010年代を代表するヒット曲をもつためである。2点目は、両者ともに自身で作詞と作曲の両方を担当し、作詞と作曲を別人が担当する場合と比較して、言語のリズムについての製作者の直観が楽曲により反映されやすいと判断したためである。

---

[9] それぞれの楽曲の情報については、以下のウェブサイトを参照した（いずれも 2019 年 4 月 19 日閲覧）。
・https://www.oricon.co.jp
・https://www.oricon.co.jp/rank/js/y/2018/
・https://www.nhk.or.jp/kouhaku/history/history.html?count=69

[10] 以下のウェブサイトを参照した（いずれも 2019 年 4 月 19 日閲覧）。
・https://www.hoshinogen.com
・https://www.riaj.or.jp
・https://www.joysound.com/web/s/karaoke/contents/annual_ranking/2017

[11] 以下のウェブサイトを参照した（いずれも 2019 年 4 月 19 日閲覧）。
・http://reissuerecords.net
・https://www.riaj.or.jp
・https://www.joysound.com/web/s/karaoke/contents/annual_ranking/2018

次節第3節で、2018年の楽曲・星野源の楽曲・米津玄師の楽曲に分けて、特殊モーラの自立性を分析する。さきに述べた通り、楽曲の1番の歌詞について、特殊モーラに独立した1つの音符が付与されていれば当該の特殊モーラは自立性をもつと判断する（図4）。特殊モーラに独立した1つの音符が付与されていなければ、当該の特殊モーラは自立性をもたないと判断する（図5）。

♪　♪ ｜　｜ CV　M	♪ ／＼ CV　M
図4. 特殊モーラに自立性あり（＝図1b）	**図5. 特殊モーラに自立性なし（＝図2）**

3. 分析結果

本節では、第2節で述べた本論の分析対象とする歌謡曲中に出現した特殊モーラについて、その自立性を分析する。本節で行った統計処理には、R Core Team（2016）を使用した。

3.1. 資料ごとの差異

表1に、特殊モーラの自立性について、3種の資料別にその概略を示す。

表 1. 3 種の資料における特殊モーラの自立性

	2018 年		星野		米津		合計	
自立性あり	313	(61.4%)	343	(87.3%)	438	(43.5%)	1094	(57.3%)
自立性なし	197	(38.6%)	50	(12.7%)	569	(56.5%)	816	(42.7%)
合計	510	(100.0%)	393	(100.0%)	1007	(100.0%)	1910	(100.0%)

表1に示した通り、3種の資料間で特殊モーラの自立性に大きな差が見られる結果となった。

まず2018年の楽曲については、61.4%の特殊モーラに独立した1つの音符が付与され、自立性が認められる結果となった。それに対し、星野の楽曲に出現する特殊モーラは、87.3%に自立性が認められた。また、米津の楽曲に出現する特殊モーラのうち、自立性が認められるものの割合は43.5%にとどまった。表1に示した3群について、自立性の認められない特殊モーラの出現頻度について有意水準5%でボンフェローニ補正を用いた上でカイ二乗検定を行った結果、いずれの2群間においても有意な差が認められた[12]。星野の楽曲は特殊モーラの自立性が高く、米津の楽曲は特殊モーラの自立性が低いと言える。このことは、特殊モーラの自立性についての直観に大きな個人差があることを示唆する。しかしながら、次の3.2節で述べる通り、特殊モー

[12] カイ二乗検定の結果は以下の通りである。検定を 3 回繰り返したため、$p < 0.016$ の場合に有意差を認めた。
2018 年と星野:　$n = 903$, $\chi^2 = 73.659$, $df = 1$, $p < 0.001$
2018 年と米津:　$n = 1{,}517$, $\chi^2 = 42.57$, $df = 1$, $p < 0.001$
星野と米津:　$n = 1{,}400$, $\chi^2 = 217.91$, $df = 1$, $p < 0.001$

ラの種類別の自立性の差については、共通した傾向がみられた。

次の3.2節で、特殊モーラの種類別の自立性の差を、3種の資料別にみる。

3.2. 特殊モーラの種類別の自立性の差

本節では、第1節（2）で示した4種の特殊モーラの種類別に自立性の差を考察する。

3.2.1. 2018 年の楽曲における特殊モーラ

2018年の楽曲に出現した特殊モーラの種類別の自立性は、表2に示す通りである。

表2. 2018年の楽曲における特殊モーラの自立性

	/J/		/R/		/N/		/Q/		合計	
自立性あり	105	(75.0%)	85	(54.5%)	68	(60.7%)	55	(53.9%)	313	(61.4%)
自立性なし	35	(25.0%)	71	(45.5%)	44	(39.3%)	47	(46.1%)	197	(38.6%)
合計	140	(100.0%)	156	(100.0%)	112	(100.0%)	102	(100.0%)	510	(100.0%)

表2に示した通り、/J/ > /N/ > /R/ > /Q/の順で自立性の認められる特殊モーラの割合が高い結果となった。ボンフェローニ補正を用いて[13]有意水準5%でカイ二乗検定を行った結果、（9）に示す通り/J/と/R/、/J/と/Q/の間に有意差が認められた。

（9）2018年の楽曲における特殊モーラ間の出現頻度の差

a. /J/と/N/: 有意差が認められなかった。（$n = 252$, $\chi^2 = 5.2552$, $df = 1$, $p = 0.022$）

b. /J/と/R/: 有意差が認められた。（$n = 296$, $\chi^2 = 12.629$, $df = 1$, $p < 0.001$）

c. /J/と/Q/: 有意差が認められた。（$n = 242$, $\chi^2 = 10.781$, $df = 1$, $p = 0.001$）

d. /N/と/R/: 有意差が認められなかった。（$n = 268$, $\chi^2 = 0.793$, $df = 1$, $p = 0.373$）

e. /N/と/Q/: 有意差が認められなかった。（$n = 214$, $\chi^2 = 0.749$, $df = 1$, $p = 0.387$）

f. /R/と/Q/: 有意差が認められなかった。（$n = 258$, $\chi^2 = 1.304e\text{-}30$, $df = 1$, $p = 1$）

3.2.2. 星野源の楽曲における特殊モーラ

星野源の楽曲に出現した特殊モーラの種類別の自立性は、表3に示す通りである。

[13] 検定を 6 回繰り返したため、$p < 0.008$ の場合に有意差を認めた。

表3. 星野源の楽曲における特殊モーラの自立性

	/J/		/R/		/N/		/Q/		合計	
自立性あり	128	(95.5%)	108	(76.1%)	78	(97.5%)	29	(78.4%)	343	(87.3%)
自立性なし	6	(4.5%)	34	(23.9%)	2	(2.5%)	8	(21.6%)	50	(12.7%)
合計	134	(100.0%)	142	(100.0%)	80	(100.0%)	37	(100.0%)	393	(100.0%)

表3に示した通り、/N/ > /J/ > /Q/ > /R/の順で自立性の認められる特殊モーラの割合が高い結果となった。星野源の楽曲における特殊モーラの自立性の高さは3.1節表1で示した通りであるが、/J/と/N/についてはほぼ全ての例で自立性が認められる結果となった。ボンフェローニ補正を用いて[14]フィッシャーの正確確率検定[15]を行った結果、（10）に示す通り、/N/と/Q/、/N/と/R/、/J/と/Q/、/J/と/R/の組み合わせで有意差が認められた。

（10）星野源の楽曲における特殊モーラ間の出現頻度の差

a. /N/と/J/: 有意差が認められなかった。 （$p = 0.713$）

b. /N/と/Q/: 有意差が認められた。 （$p = 0.001$）

c. /N/と/R/: 有意差が認められた。 （$p < 0.001$）

d. /J/と/Q/: 有意差が認められた。 （$p = 0.003$）

e. /J/と/R/: 有意差が認められた。 （$p < 0.001$）

f. /Q/と/R/: 有意差が認められなかった。 （$p = 0.830$）

3.2.3. 米津玄師の楽曲における特殊モーラ

米津玄師の楽曲に出現した特殊モーラの種類別の自立性は、表4に示す通りである。

表4. 米津玄師の楽曲における特殊モーラの自立性

	/J/		/R/		/N/		/Q/		合計	
自立性あり	187	(61.7%)	132	(36.8%)	79	(40.5%)	40	(26.7%)	438	(43.5%)
自立性なし	116	(38.3%)	227	(63.2%)	116	(59.5%)	110	(73.3%)	569	(56.5%)
合計	303	(100.0%)	359	(100.0%)	195	(100.0%)	150	(100.0%)	1007	(100.0%)

表4に示した通り、/J/ > /N/ > /R/ > /Q/の順で自立性の認められる特殊モーラの割合が高い結果となった。この序列は、3.2.1節で述べた2018年の楽曲における序列と同一である。ボンフェロ

[14] 検定を 6 回繰り返したため、$p < 0.008$ の場合に有意差を認めた。
[15] 表 3 においては期待値が 5 を下回るセルが含まれるため、カイ二乗検定ではなくフィッシャーの正確確率検定を使用した。

ーニ補正を用いて[16]有意水準5%でカイ二乗検定を行った結果、（11）に示す通り/J/と/N/、/J/と/R/、/J/と/Q/の間に有意差が認められた。

（11）米津玄師の楽曲における特殊モーラ間の出現頻度の差

a. /J/と/N/: 有意差が認められた。（$n = 498$, $\chi^2 = 20.592$, $df = 1$, $p < 0.001$）

b. /J/と/R/: 有意差が認められた。（$n = 662$, $\chi^2 = 39.967$, $df = 1$, $p < 0.001$）

c. /J/と/Q/: 有意差が認められた。（$n = 453$, $\chi^2 = 47.91$, $df = 1$, $p < 0.001$）

d. /N/と/R/: 有意差が認められなかった。（$n = 554$, $\chi^2 = 0.60079$, $df = 1$, $p = 0.438$）

e. /N/と/Q/: 有意差が認められなかった。（$n = 345$, $\chi^2 = 6.5939$, $df = 1$, $p = 0.010$）

f. /R/と/Q/: 有意差が認められなかった。（$n = 509$, $\chi^2 = 4.3849$, $df = 1$, $p = 0.036$）

3.3. 先行研究と本論の 3 種の資料の対照

本節では、第1節で挙げた諸先行研究と本論で扱った3種の資料における特殊モーラの自立性について、その異同を論じる。

特殊モーラの種類別の自立性の差について、先行研究と本論で扱う3種の資料の結果を表5にまとめる。

表5. 先行研究と本論で扱う3種の資料における特殊モーラの自立性の差

資料	特殊モーラの自立性
a. 氏平（1996）資料1・資料2	/J/ > /R/ > /N/ > /Q/
b. 窪薗（1999）	/J/ > /R/ > /N/ > /Q/
c. 氏平（1996）資料3	/J/ > /Q/ > /N/ > /R/
d. 平田（2017）	/J/ > /N/ > /Q/ > /R/
e. 田中（2000, 2008）	/J/ > /N/ > /R/ > /Q/
f. 本論 2018年	/J/ > /N/ > /R/ > /Q/
g. 本論 米津	/J/ > /N/ > /R/ > /Q/
h. 本論 星野	/N/ > /J/ > /Q/ > /R/

表5a〜hに共通して、/J/の自立性が一貫して高いこと、/Q/の自立性が低いことが目立つ。

表5aの氏平（1996）の資料1・資料2と、表5bの窪薗（1999）は、自立性の高い順に/J/ > /R/ > /N/ > /Q/という序列で一致している。この序列は、上野（1984: 53）で述べられている、日本語諸方言においてアクセント核を担いやすい特殊モーラの序列として示されているものと同一である。氏平（1996）の資料1は「明治に作詞作曲された童謡や地方の民謡それに現代のポップスま

[16] 検定を 6 回繰り返したため、$p < 0.008$ の場合に有意差を認めた。

で多種多様な曲が111曲納められている」もの、資料2は「明治・大正・昭和（戦前）に作詞作曲された、音楽の教科書に載っている曲」を納めたものである。また、窪薗（1999）は『NHK日本の歌・ふるさとの歌100曲』に掲載の全100曲を分析対象としている。いずれも、本論で扱った2010年代の歌謡曲とは大きく特性の異なるものであると考えられ、本論で分析対象とした資料とは異なる結果が得られたものととらえられる。

表5d〜hの5種の資料については、いずれも/J/と/N/の自立性が高く、/R/と/Q/の自立性が低く出たことが共通している。このことは、田中（2008: 69）で示されている、特殊モーラの自立性の階層に2つの基準が想定されることで説明が可能である（12）。2つの基準とは、ソノリティーにもとづく（12a）と、その特殊モーラ単独で独自の音色を有するかどうかの安定性に基づく（12b）である（田中 2008: 69）。ソノリティーとは、日本語できこえとも呼ばれ、同一条件下で発音された種々の音の相対的な大きさを指す（亀井・河野・千野編 1996: 264）。亀井・河野・千野編（1996: 264）では、一般に無声閉鎖音＜有声閉鎖音＜無声摩擦音＜有声摩擦音＜鼻音＜流音＜狭母音＜広母音の順でソノリティーが大きくなることが示されている。

（12）特殊モーラの階層に関する2基準（田中 2008: 69・[+son] は共鳴音を、[−son] は阻害音を表す）

a. ソノリティー:

/J/　/R/　>>　/N/　>>　/Q/

V　>>　C [+son]　>>　C [−son]

b. 安定性:

/J/　/N/　>>　/R/　/Q/

独自の音色あり　>>　独自の音色なし

（12a）のソノリティーの面では、母音性の/J/と/R/が上位に位置し、共鳴音の子音である/N/が続き、もっとも自立性が低いのが阻害音の子音である/Q/となる。表5aの氏平（1996）の資料1・資料2、表5bの窪薗（1999）の結果は、この（12a）の序列に従った結果であると考えられる。

一方、（12b）の安定性の面でみると、/J/と/N/は先行する自立モーラとは別の音色をもつ特殊モーラである。それに対し、/R/は先行する自立モーラの母音と同一の音色を、/Q/は後続する自立モーラの子音と同一の音色をもち、/R/と/Q/はそれ自身で独自の音色をもたない特殊モーラであると言える。この安定性の観点からは、/J/と/N/の自立性が高いと判断され、/R/と/Q/は自立性が低いととらえられる。さきに述べた通り、表5dの平田（2017）、表5eの田中（2000, 2008）、表5fの本論における2018年の楽曲、表5gの本論における米津の楽曲、表5hの本論における星野の楽曲は、いずれも/J/と/N/の自立性が高く、/R/と/Q/の自立性が低く出る結果となった。これらの資料においては、（12b）の安定性の基準によって特殊モーラ間の自立性の差が生じているものととらえられる。

残る表5cの氏平（1996）の資料3においては、/Q/の自立性が高く出た点で、他の資料と結果が異なり、（12a）（12b）の2つの基準にも沿わない結果である。氏平（1996: 74）では、/Q/の自立性の高さについて、「無音の長さの方が聞き取りには実在感があるという結果かもしれない」と述べられている。/J/の自立性の高さ、/R/の自立性の低さといった面では、（12b）に沿う結果であると言える。

以上本節では、資料ごとの特殊モーラ間の自立性の差について考察を行った。田中（2008）では特殊モーラの自立性を判定する基準として（12a）のソノリティーと（12b）の安定性の基準が提示されており、本論で分析対象とした2010年代の歌謡曲においては（12b）の安定性の基準に沿う形で特殊モーラ間の自立性の差がみられたことを指摘した。

4. まとめ

本論では、2010年代を代表する2名の男性シンガーソングライターの楽曲を取り上げ、2名の楽曲の間に特殊モーラの自立性の点で大きな差異がみられたことを示した。その一方、特殊モーラ間の自立性の差については、2名ともに/J/と/N/の自立性が高く、/R/と/Q/の自立性が低いという傾向を共有していた。田中（2008: 69）では特殊モーラの自立性の基準として、先行する自立モーラと別の音色をもつか否かで特殊モーラを分類する安定性の基準が示されており、本論で扱った2名のシンガーソングライターの特殊モーラ間の自立性の差も、この安定性の基準に沿っているととらえられることを論じた。

歌謡曲における日本語のリズムは自然言語としての日本語のリズムを反映したものであると考えられる一方、歌謡曲のリズムと自然言語のリズムの異同については、また詰めるべき課題が残されている。両者間のより強い関連づけを今後の課題としたい。

参考文献

氏平明（1996）「歌唱に見る日本語の特殊モーラ」音韻論研究会編『音韻研究–理論と実践』71–76. 東京: 開拓社.

上野善道（1984）「地方アクセントの研究のために」『国文学解釈と鑑賞』昭和 59 年 5 月特別増刊号. 至文堂: 47–64.

上野善道（2003）「アクセントの体系と仕組み」 上野善道編『朝倉日本語講座 3　音声・音韻』61–84. 東京: 朝倉書店.

亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）（1996）『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』東京: 三省堂.

窪薗晴夫（1999）「歌謡におけるモーラと音節」音声文法研究会編『文法と音声 II』241–260. 東京:くろしお出版.

自由国民社（2019）『オールヒット曲 2019』東京: 自由国民社.

シンコーミュージック・エンタテイメント（2018）『米津玄師 COLLECTION -GUITAR

SONGBOOK-』東京: シンコーミュージック・エンタテイメント.

田中真一（2000）「日本語歌謡曲におけるリズムの変遷」『2000 年（平成 12 年）度日本音声学会全国大会予稿集』153−158.

田中真一（2008）『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』東京: くろしお出版.

平田秀（2017）「2010 年〜2016 年の日本語歌謡曲における特殊モーラ」『東京大学言語学論集』38: 51−63.

ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス出版部（2017）『ギター弾き語り 星野源 BEST SELECTION』東京: ヤマハミュージックエンタテイメントホールディングス出版部.

R Core Team (2016) *R: A language and environment for statistical computing.* R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL https://www.R-project.org/.

Vance, T. J. (1987) *An Introduction to Japanese Phonology.* Albany: State University of New York Press.

Special Morae in Japanese Popular Songs Released in the 2010s: Comparing Two Singer-Songwriters

HIRATA Shu
hiratashu1925@gmail.com

Keywords: Japanese Phonology, Syllables and Morae, Special Morae

Abstract

In this article, we examine whether special morae in recent Japanese popular songs can be treated as independent units through comparing two singer-songwriters: HOSHINO Gen and YONEZU Kenshi. The rate at which special morae are given independent notes in the songs is significantly different between the two singer-songwriters: that of HOSHINO is high and that of YONEZU is low. However, they share common tendencies in whether they treat special morae as independent or not: the second morae of diphthongs and moraic nasals commonly show a high rate of independence, and the second morae of long vowels and moraic obstruents show a low rate of independence. We argue that special morae that have independent sounds themselves tend to be treated as independent and those that do not have independent sounds themselves tend not to be treated as independent.

（ひらた・しゅう　国立国語研究所）